

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

物忘れ進みし妻の手をにぎり尻とりしつつ峡の道ゆく 藤井 幹雄

「手をにぎり」と「峡の道ゆく」の間に入ることは。たとえばすぐに思いつくのは、〈ふたり寄り添い〉とか、〈杖を頼りに〉とか、〈秋の深まる〉とかであろうか。どの例でもそれなりに調子は整うし、事実がそうなのだろうなと思わる。しかし、作者の選んだことばは何か。それは〈尻とりしつつ〉だった。「しりとり」というあどけない、こどもらしい遊びをしながらと言うことによって、歌のなかの妻は格段に哀感を帯び、寄り添う二人の姿は強く読者に印象づけられる。

【俳句】

満州も昭和も遠し天の川 矢野 博子

満天の星空の中に天の川を見付けその流れ行く北の方向にある、遙か離れた異国の満州を懐かしんでおられる。

そのような様子から推測すると、お父様が復員兵か、ご家族が満州の開拓団の一員で、戦後日本へ引き揚げられた家族であるかもしれない。

星空を眺めるたびに戦後の家族の生活の苦しさを通して、現在の子供の成長の喜びや幸せを噛み締めて天の川と語られておられるのであろう。

【川柳】

ふる里の元気が届く米袋 小白金 房子

実りの秋に新米が届くと、故郷の山河と共に、少し年老いた父母の懐かしい顔が浮かんでくる。凡庸な作品の中に教わる事は無限であり、絆や元気の源をズシリと感じた一句である。

【散文】

「家族の花」 有原 悠二

鬱病で厭世的な日々を過ごしている主人公が或る日、大阪の駅の構内で「終わらないノスタルジア、山陰」と書かれたポスターを見る。鳥取か島根の田園風景を背景に、端正な顔立ちの少女が遠い視線で立っている写真だ。島根が故郷だった彼は、瞬時に放置している田舎の家に帰ることを決断する。小説家になるつもりだったが、果たせず、シングルマザーの女と結婚していた。大阪から帰る車の中でふとハスの花と亡くなった兄と父母の恩恵を思い出し、再出発を決意する。幻想的な小説だが、リアリティのある秀作に仕上がっている。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

目の前の鏡見ているぼくのかお心の声があらわれている 中島 康介

「心の声」がとても良いです。顔の表情には喜びや悲しみ怒りなどありますが、おそらく嬉しいことがあったのではないのでしょうか。心に声はありませんが作者には表れたと言い切ってあざやかです。

【俳句】

一日が長く感じる春の雨 景山 翔

いつまでも降り続く春の雨を見ながら心が急く事があるのであろう。中学も上級生になりこれから運動部の中心になって戸外で活躍をしたいと思っていると、今日も雨のために運動場が使えない。

室内で行うトレーニングは単調になり易い。早く外で思い切り練習がしたいと思う心が伝わって来る。

【川柳】

目玉やき玉子のきみのお月さま 藤原 美結

目玉やきから、お月さまに飛躍する空想力の逞しさに感心しました。心の目は無限大なんだなあと思い、改めて秋の月を見上げて感じています。

【詩】

「父の顔」 城市 耕希

父親の顔（表情）をよく観察していますね。「どんよりにらむ」は面白い表現です。

【散文】

「春が始まる」 大岡 莓香

作者は、中学2年生である。一編の小説としての完成度が非常に高い。原稿用紙17枚の大作であるが、テーマが明確である上に構成も優れており、ストーリーに破綻がない。余韻の残る終末とタイトルが見事にマッチしている。悲しみから立ち上がり「希望」を感じさせる傑作である。才気あふれる作者の今後の飛躍に期待したい。次回作を、ぜひ読みたい。